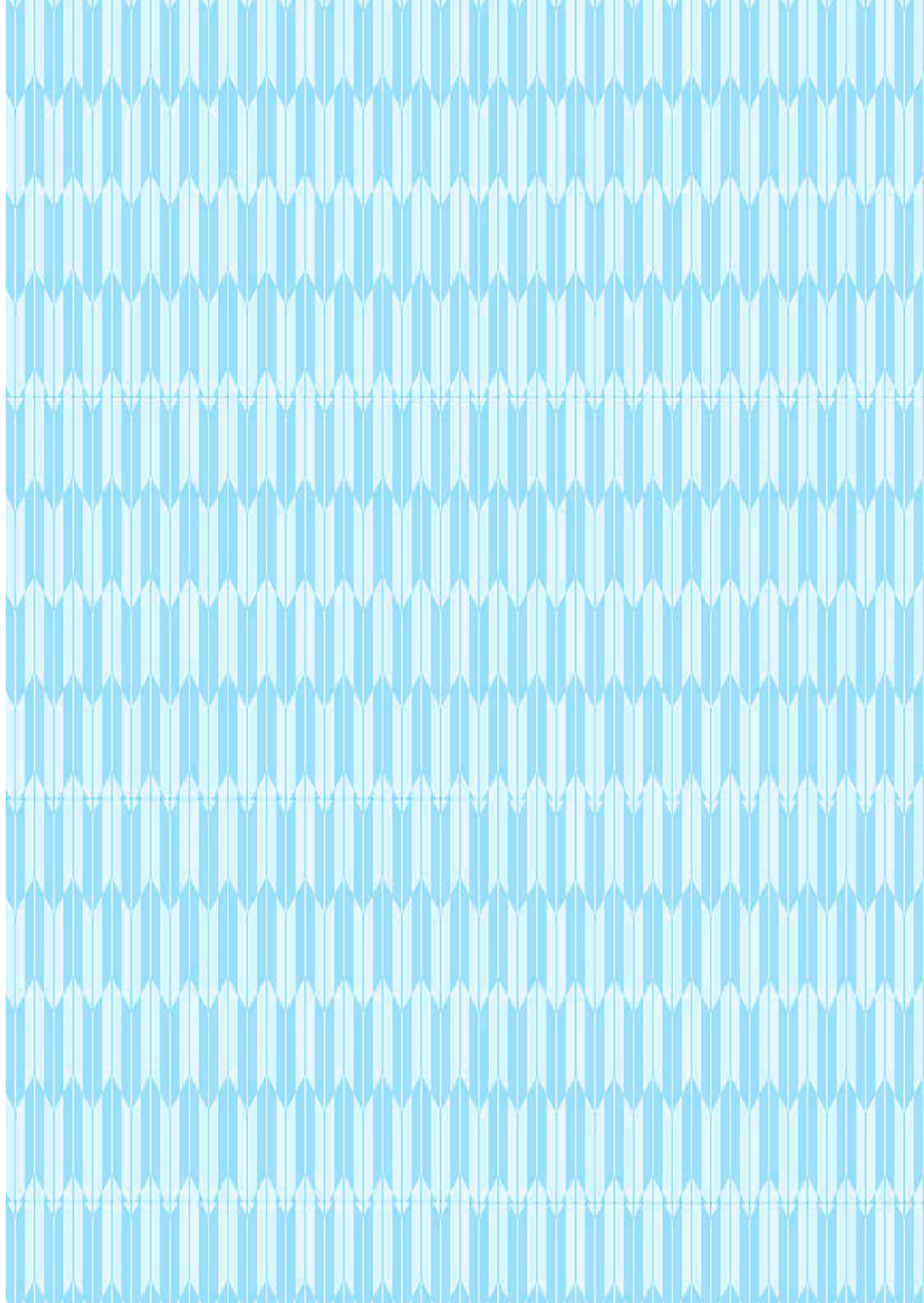


あを 12

2025

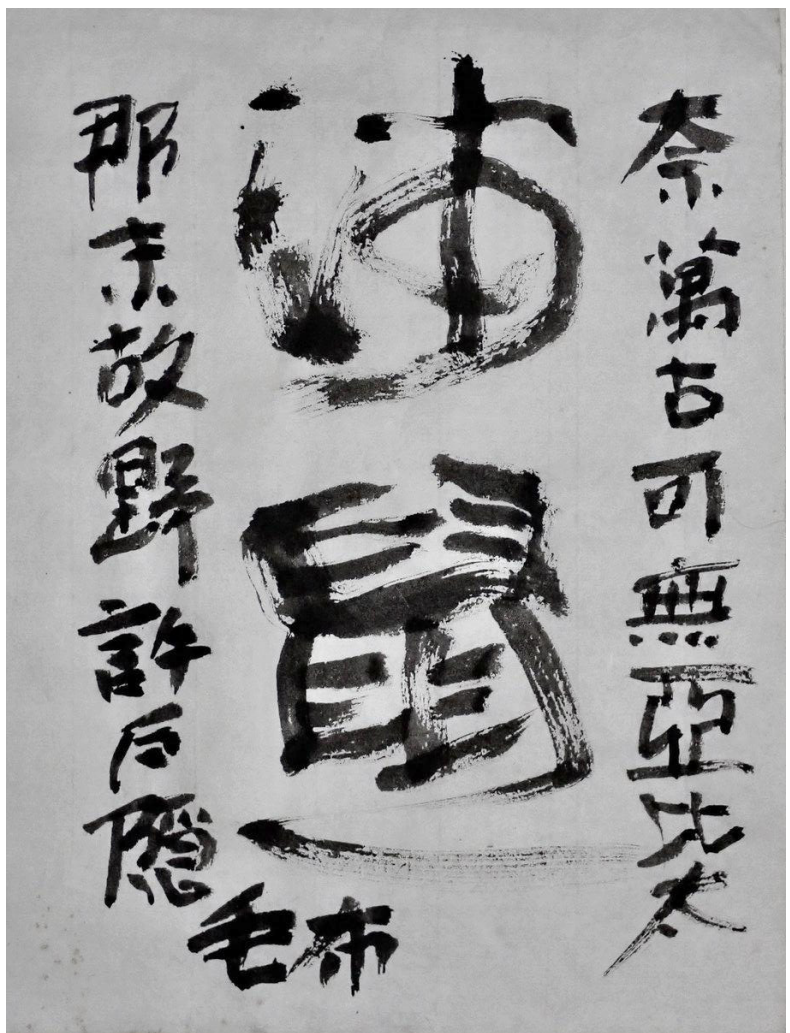


撮影：墨沱



皆
蚓
龜
蛇

海鼠噛むあひだ海鼠のことおもふ
竹僊



十二月集

坐・誹

佐藤 竹僊

唐黍の花シヤラシヤラと陽に鳴れる

隠す意のあるかに夏の草猛る

朝顔の頸のみえてもう暑い

攻める悪護るも悪と終戦日

あさつゆのひとつら茅の葉のうへに

秋風をみてゐてきいてゐてゆふべ

踏切のなかばでとまる秋だもの

菊日和父に持たせる一里飴

流れゐるものを乗せゐる秋の水

花筏改作の下をゆつたり鵜水輪



すれ違ふ

森なほ子

秋の暮橋の左右をすれ違ふ
俯いてすれ違ふ橋秋の川
戸締めまりす満月空に置いたまま
更けゆけば満月小さし風の中
水草の上行く水も秋の水
秋夕焼明日在ることを疑はず
夜明け迄まだ間のありぬ天の川
朝靄に秋の灯残る山の町

十月

赤座典子

撓なる柿照り映える並木道
溢るるや甲府盆地の秋灯
葡萄棚ぎっしり下がる円錐形
瑞々しきままの糠漬け隼人瓜
閉会の辞母の涙す運動会
冬近し朝な夕なの野球漬け
阿諛追従秋の嵐の吹きて欲し
十月や幾日も超ゆ三十度



神無月

秋川泉

ゆるやかに香の流れ来る金木犀
常よりもまんまる丸に月育つ
幼子の指したる先に赤き月
しめやかに流れてゆくや風の盆
芋虫をからから笑ふ子供たち
見ず終ひ腹に響いた秋火花
酔芙蓉たふたふ咲けず時過ぐる
芙蓉咲く大音量の寡婦の家

薄荷糖

七郎衛門吉保

稲刈りの一息つきて薄荷糖
胃も腸も切りて変はらぬ温め酒
秋の畔残る小花の我が身かな
コロナ越え千人超えの運動会
甲斐盆地キラ星の如夜長なる
実柘榴のルビーに勝る外皮かな
冬隣右へ右へと垣間見え
晩秋や頁折らるる文芸誌
秋澄むや半月切りの清まし汁
行く秋や野党連携地下街を



もみぢ

篠田純子

A I に騙されたかも文化の日

A I におすすめされて紅葉狩

耕書堂ていの眼鏡や菊人形

焼き栗爆ぜ蛙手紅き高尾山

雁

無縁坂の明治の煉瓦櫓もみぢ

無縁坂先へ先へと薦もみぢ

ゆく秋や「おたま」佇む無縁坂

非可聴音

篠田大佳

青年の魔法の尽きて秋の朝

一足の革靴消えて秋高し

秋晴るる手縫ひのをのこ提げながら

秋傘に顔を隠して笑ふのさ

秋しぐれ非可聴音に満ちし街

うそ寒や皆まぼろしを罵倒する

秋夕焼みな傷ついてゐたんだな

去る者へ別れもいへず秋の果

秋しぐれ走れ郵便ポストまで



雑詠

須賀敏子

秩父路や秋明菊の咲き揃ふ
柿を干す雨の降らない日を願ひ
さくさくと下ろす心地や山の芋
日を浴びて豊かに実る今年柚子
廃校で秋のバザーを賑やかに
秋深し村の外れに父母の墓
初雪や那須連山のくつきりと

すすき

長崎桂子

米をとぐ空気すがやかやつと秋
敷石をはき水を撒くやつと秋
米国野球放映うれし秋かな
名月や小型車の列ながながと
名月の輝きの時うつろにて
電車こむ街も混雑祝祭日
台風来寒暖の差のめまぐるし
畦道やすすき御出と言ふごとし
店頭に菊の鉢植ゑ見事なり



秋収集

スカートよりズボン複雑難まつり

佐藤 竹僊

夜の帳おり風出でしすこし秋

長崎 桂子

散歩道きのふより今黄金波

昔子らの舌甘くして一位の実

森なほ子

伸びるだけ伸びて溝蕎麦凭れあふ

ハルウララ挑み続けて秋の声

赤座 典子

秋の雷屋根の真上に四半刻

秋暑し小亀と歩く男あり

秋川 泉

残暑をばものともせずに亀歩む

再入院遠くにあれと曼珠沙華

七郎衛門吉保

雷公の光も音も金属系

秋深し母の匂ひのサロンパス

篠田 純子

あきあかね孫の彼女は美人とか

秋の蜂生きるばかりも芸のうち

篠田 大佳

怒らせし肩は秋雨しゅううを受けにけり

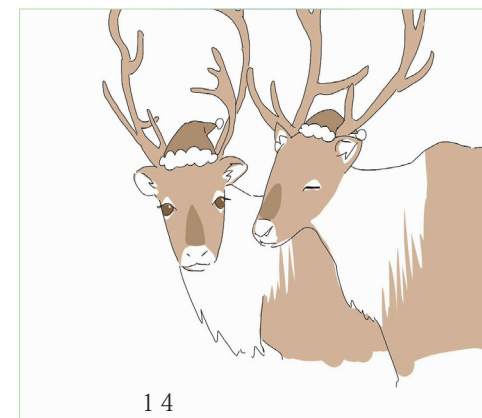
妹の弾む声して今年米

須賀 敏子

茨城や母の生家の次郎柿

緩く坂柿のなる家過ぎて橋

喜孝抄



月の地の暑きとおもふ熱帯夜

佐藤竹僊

月の気候を調べたところ、太陽が当たっている時は摂氏一一〇度、太陽が当たらない時は摂氏マイナス一七〇度と寒暖差が非常に激しい気候になっているそうです。月は地球より重力が軽く、地表に水や大気を保持できないため、太陽光に大きく影響されるそうです。月の光を涼しいと感じたい暑さ、遠くから見たら涼しい月も、実際の気候は今の地球以上に苛烈であるようです。月に比べれば、異常な暑さも少しは涼しさを感じるかもしれません。(大佳)

廣き葉のまとめてこぼす夏の雨

佐藤竹僊

里芋の葉のような大きな葉に、降り注がれた雨は、しばらくしてから傾いた長い茎から一気に落下します。其の様子を作者は、まとめてこぼすと詠まれています。尋常でなかった今年の暑い夏でも、一瞬の涼しさが感じられたことでしょう。(典子)

病院の広き敷地に曼珠沙華

須賀敏子

作者の身近な病院には、曼珠沙華が病院の敷地にあるといえます。彼岸花の別称がある曼珠沙

華ですから、患者さんの中には嫌がる人もいると思います。ただ、この病院では曼珠沙華をそのままにしているようです。妖しく咲く曼珠沙華の魅力に魅了されたのか、花に興味がないのか、考える時間がないのか。植栽の担当者に意図を訊いてみたいものです。(大佳)

産土に妹住みをり帰省かな

須賀敏子

実生活から生まれた俳句は、頭の中で組み立てた俳句とは比べやうもなく印象深い。「産土」という語彙は生まれた土地といふ意味以上に重みがある。この句の産土はいつかり時といふ紐で結ばれてゐる。そこに妹さんが住まはれてゐるのは、大変ありがたいことであらう。敏子さんのご好意で、妹さんが作られた最後のお米をありがたく美味しく頂戴した。(喜孝)

ベランダに干し物少し鬼やんま

須賀敏子

「干し物少し」に興味を持った。干し物の少ない理由は述べられてをられない。作者の年齢による生活環境の変化とか、家族構成といふやうな理由は書かれてゐない。俳句はこのくらいの容量詰め込みが良いやうだ。それにしても「ベランダでオニヤンマ」はこんな瑣末な理屈を吹きとばす。爽やかな空気感、開放感に感心した。干し物が少しになったことを嘆いてはゐない。(喜孝)

テレビに終戦時の悲報悲しすぎます

長崎桂子

長い音数をとって、悲しみを伝えています。リズムが伸びることで、悲しみの感情がより伝わるように思います。二〇二五年は、第二次世界大戦、特に原爆投下のことを回想する記事が多く、戦後八十年の節目であることを痛感させられます。最近の若い人の語彙では、「悲報」という言葉を濫用していて、悲報でないことにも用いるので、言葉の意味が死にかけていますが、これはきちんと「悲報」を言っていて、切実さが伝わってきます。（大佳）

跌にて突堤 まはり楽しみて

長崎 桂子

桂子さんを知らぬ人がこの句を読んだならば元気な若い人の作品と思はれるだらう。桂子さんをご存じの方はその健やかさに羨望の目を向けるだらう。跌で大地に触れる感覚は生きている喜びでもある。

遠い昔、典子さんたちとミャンマーの古都バガンに遊んだことがある。仏塔バゴダは跌でなければ入ることができない。跌になつたとき、子供のころに戻つた気がしたものだ。

この句にも「楽しみて」と素直に表現されてゐる。きつとわたしのやうな感覚で突堤を歩かれたことだらう。（喜孝）

大通り 一本入る 夏暖簾

森なほ子

立派なお店の並んでいる大通り。でも脇道には、それほど大きくない、暖簾のかかったお店が

あるようです。夕暮れからは、薄明りのともる、粋な小料理屋さんになるのではと期待してしまいました。（典子）

牧場に女棲 みつく雲の峰

森なほ子

ドラマの、映画のシナリオが書けさうな時の長さを有した句。「棲みつく」は棲みつく以前を知らなければ使へない。牧場は男性の仕事場だと思はれてゐる前提でこの句を読むが、実社会は女性の進出も進んでゐるやうだ。「棲みつく」にただ女性が職についたとはちがふ雰囲気がある。ここに物語り性が生じる。牧場に女丈夫なひとが働き始めた。「雲の峰」で開放的な牧場をおもふ。力強い社会の変容をなほ子さんは頼もしく思はれてをられる。（喜孝）

プリンカー 我が孫も着け夏期講習

赤座 典子

プリンカーとは、遮眼革とも呼ばれ、馬の視野角を狭めて前方への集中力を高めさせるものようです。それに着想を得た眼鏡を眼鏡メーカーが販売しているようで、作者のお孫さんは勉強に活用しているという句意と読みました。よそ見して授業に集中できないらしいお孫さんに共感します。今は、時代の変化なのか、競争としての勉強にそこまでの価値を感じなくなってきたいて、無理なく勉強してほしいなあと思います。（大佳）

文鳥も吾も爪伸びてをり秋初め

赤座典子

文鳥を大事に、家族のやうに思はれてゐるやうすを「文鳥も吾も」で表はしてゐる。苦髪楽爪といふ四字熟語がある。「楽爪」は樂してゐる、怠けてゐると爪が伸びるといふ意。科学的根拠はないらしいが、私は実感してゐる。「文鳥も吾れも楽爪秋はじめ」と川柳風に詠みかへ典子さんの生活ぶりを羨んでゐる。(喜孝)

生身靈あと一球と息ころす

秋川 泉

野球大国のアメリカで、日本人選手が大活躍。テレビでは注目の試合を連日生放送。元気な高齢者たちも時間を問わず熱心に応援しています。切迫した場面での「息ころす」という表現からは、真剣に、前のめりになって、応援している様子が伝わってきます。本当に熱い夏でした。(典子)

夏負けし赤鮫鰯になりにけり

秋川 泉

ただの鮫鰯ではなく「赤鮫鰯」とこだはつてゐる。赤鮫鰯を調べざるを得ない。赤鮫鰯はミドリフサアンコウともいふらしい。『崖の上のポニョ』のポニョに似てゐるともいはれ人気があるらしい。説明によると水深一五〇mから三〇〇mの砂泥地の海底にゐてほとんど動かない。エビ類や小魚をひたすら待つ生態とのこと。赤鮫鰯の生態の一端を知りこの句を読み納得した。どうせ

鮫鰯になるなら、可愛らしい赤鮫鰯の姿を自分の上に重ねることに拘つたのかもしれない。夏負けをどこか楽しんでゐる一句。(喜孝)

沖縄に歓喜熱気の野分立つ

七郎衛門吉保

今年の夏の甲子園で、沖縄尚学が優勝しました。作者はこの事実を是非とも残しておかねばと、句にしました。沖縄の人々にとって、どんなにか嬉しい出来事だったことでしょう。筆者も、何十年も前に初めて沖縄を訪れ、基地とその中で暮らしている人々にショックを受けて以来、どのように応援出来るかと考え続けています。守礼門が復元されたら、沖縄の人々と、喜びを分かち合いたく、是非訪れたいと思っています。(典子)

三歳の記憶忘るな敗戦忌

七郎衛門吉保

人の記憶は普通三歳以前の出来事を具体的なエピソードとして思ひだすことが出来ないさうです。このことを幼児期健忘といふさうです。戦争の記憶が吉保さんには初めての記憶なのでせうか。そのことを生涯忘れてはならぬことと念ひ定められた。詳らかに記憶の内容は書かれてゐないが、反戦の思ひをバックボーンに生きてこられたかと思ふ。戦争中とはいへその中に懐かしい、たのしい思ひ出の一つや二つはあるといいですね。(喜孝)

胡麻おはぎ 一辺倒の父であり

篠田純子

一辺倒という中七で、お父様のすべてが、言い表されているのではないのでしょうか。「おはぎは胡麻！」という以外にも、心に決めていて、しっかりと守っている事が、多々あるのでしょうか。「昭和の男性」を言い得て妙！ 感心いたしました。蛇足ですが、女性の場合は、年齢を問わず、「季節限定」と銘打たれたものには、つい心が動いてしまうことが多いようです。（典子）

トランジスタグラマーの祖母稲の花

篠田純子

「祖母」と堅苦しく書いてゐるが、このおばあさまが「トランジスタグラマー」とはなんとも魅力的な表現である。トランジスタグラマーといふ言葉が流行つたのは一九五〇年代後半。指折り数へてきのふだとおもつてゐるのに七五年も時が過ぎて……。おばあさまを懐かしく魅力的に描いた作品、と終はればよいのだが季語の「稲の花」である。通常？の季語の付け方ではない。稲はよく見なければ行き過ぎてしまふ花である。イネ科の花は総じてつつましひ花である。それだけに目にとると立ち止まざるを得ない。この神聖でもあり、日本人の生命力の源である花がこんなにつつましやかなのに感動する。稲の花はおばあさまへのそして先祖への礼賛であらう。

今夏、近所の農園でトウモロコシの花に出会つた。太陽の光を浴び、陽の力でキラキラと揺れてゐる花。このトウモロコシをとてゑも食へたくおもつたが買ふ機会を逸してしまつた。（喜孝）

盆踊 踊る阿呆に撮る阿呆

篠田大佳

一般的に言われている慣用句は、「踊る阿呆に見る阿呆」ですが、作者はこの盆踊りを撮影している人々をも「阿呆」として詠まれています。今の時代は、あらゆる人があらゆる物にスマホを向けています。踊りの列、見物人の列と共に向けられているスマホの列にも、作者は、距離を置いているようです。（典子）

八月 尽 明日も八月ならんかな

篠田大佳

ここ数年来夏の暑さは耐え難い。気象用語では夏日・真夏日・猛暑日と暑さにも階級がある。猛暑日といふ用語が使はれたのは二〇〇七年から。原発事故後クーラーを控えるやうにとテレビが訴えてゐたのが嘘のやうに今はクーラーの使用を進めてゐる。電力の供給力が増したのだらう。クーラーが無ければ寝苦しい夜が続く八月。永久に続くかと不安にもなつた。秋は瞬時にをはり冬になつてしまつた。今になつて振り返ればこのやうに書けるが、八月になつても何のその暑さの猛威は衰えなかつた。掲句のごとくである。

多くの人がおもふことを「ならんかな」と締め通俗的になるテーマを格高くしつかりと一句に纏め上げた。（喜孝）

季語あれこれ 「初氷・初雪ほか」

《初氷》

東京に氷が張るといふことはしばらく見なかった気がする。が、ここ数年見ることが多くなつたやうにおもつた。気象台から「昨日（12月19日）、東京で初氷を観測しました。これは、平年（12月24日）より5日早く、昨年（12月15日）より4日遅い観測でした」と。氷が身近で張るのを見つけるとなぜか安心するのが不思議だ。

初氷猫がバケツを覗きこむ
早崎 泰江
初氷をさな心につまみあぐ
早崎 泰江
初氷めだかの安否たしかめり
早崎 泰江
初氷馳走となりて皿の上
東 亜 未
初氷期待をこめてのぞく甕
早崎 泰江
初氷足下の朝静かなり
長崎 桂子
空堀川水ある処初氷
須賀 敏子
初氷張ると日記に今日終る
田中 藤穂
河光り富士見ゆる日や初氷
森 なほ子

かぜあめは舊き友垣初氷
翳し見る手に三ミリの初氷



《初雪》

東京の初雪は平年で一月三日。雪の後始末は大変だが降り始めると華やいだ心持になる。

東京初雪妻の両手に積りけり
堀内 一郎
初雪や何する人か夜明け前
渡邊 京子
初雪や長靴の紐の堅結び
佐藤 恭子
初雪や戸棚の奥のゴム長靴
芝宮須磨子
初雪に慣れぬ都会の雑音す
篠田 大佳
湯煙の中に初雪訪れる
松村美智子
初雪や大根畑埋めつくし
須賀 敏子
初雪や雪止みそこに雪の精
松村美智子

佐藤 竹僊
七郎衛門吉保

初雪や天女にすこしつちふまず
佐藤 竹僊
初雪や砂糖菓子めく赤き岩
赤座 典子
初雪や白湯にとけゆく諸焼酎
佐藤 恭子
初雪や翼あるごと沼ひかる
渡邊 友七
初雪や少女駈け出す頬の珠
佐藤 恭子
東京初雪少年の目になりてこそ
堀内 一郎
初雪や此の時が大事と人が云ふ
芝宮須磨子
初雪や揚げアンパンの粉砂糖
長崎 桂子
初雪の根雪となりて橋の上
大日向幸江
初雪やうんざりの程降り積もる
長崎 桂子
初雪や上枝下枝と降り渡る
佐藤 恭子
初雪の窓に夕映鈴鹿嶺
長崎 桂子
住み馴れし街初雪に輝けり
赤座 典子
初雪を病窓に見る佳い知らせ
石森 理和
集中治療室から一般病棟窓の初雪
篠田 純子
六本木ヒルズより初雪を見下ろせり
篠田 純子
初雪や過ぎしひととせ隠したる
七郎衛門吉保
初雪やゴミ収集車の労苦に
長崎 桂子

初雪や息を南に吹きかけり
七郎衛門吉保
初雪をぺらと乗せたり浅間山
森 なほ子
初雪や泥にまみれてラガーマン
須賀 敏子
初雪や一着おほく身にまとう
長崎 桂子
初雪や夜のカーテンを閉め残し
森 なほ子
初雪が降つたといふに甘睡せり
佐藤 竹僊
初雪や触れるととけるささやきに
篠田 大佳

《餅搗》

自衛隊から餅搗き案外憂国忌
堀内 一郎
餅搗に声かけ搗きたて供さるる
鎌倉喜久恵
餅搗の裏の焚口いつか昏れ
佐藤 竹僊

《年の市》

年の市七味小辛く眺へる
芝 尚子
両の手に余る荷となり年の市
木村茂登子
鳴門巻入りが支那そば年の市
森 理和



高窓の見送る猫や年の市
裏道を抜けて始まる年の市
常滑の急須を選ぶ年の市
年の市人混み離れヒヨコ売り

斉藤 裕子
大日向幸江
田中 藤穂
大日向幸江



《クリスマス》

クリスマスは日本で新年を迎える先達。キリスト教とも西洋の風習とも違ふ日本の風習になつてしまつた感がある。親も子もそして恋人たちも楽しみに待つてゐる。

薔薇包む七色の紙クリスマス
エレベーターの自惚れ鏡クリスマス
幼よりクリスマスカードがんばつて
クリスマス街に小さな靴屋なし
妹も酒ぐせ悪くクリスマス
愛しき者愛しみ抱くクリスマス

芝 尚子
芝 尚子
松本 米子
竹内 弘子
堀内 一郎
芝宮須磨子

ヤケ酒に心身倒るクリスマス
クリスマスビル煌めいて新都心
クリスマス祝ふ老どち笑顔満ち
リムジンの胴間延びしてクリスマス
クリスマスケーキにツリー気ままなり
クリスマスキャロリングの声はずみ
クリスマス螺旋階段のぼりつめ
童話めく銀座の交番クリスマス
クリスマスイヴ満月のいとほしく
帝劇に白いリムジンクリスマス
クリスマス賛美歌の45番が好き
クリスマスケーキ傍へに賀状書く
神佛は良きにはからへとクリスマス
金星が頑張つてゐるクリスマス
クリスマス偽物と識り買ふバッグ
娘らはバッグに靴までクリスマス
君の声すこしあたたかクリスマス
午後四時にぱつと始まるクリスマス

篠田 大佳
吉成美代子
芝宮須磨子
篠田 純子
芝宮須磨子
堀内 一郎
田中 藤穂
芝 尚子
篠田 純子
木村茂登子
鎌倉喜久恵
木村茂登子
木村茂登子
木村茂登子
齊藤 裕子
井上 石動
篠田 純子

大尺寸の男装クリスマス

篠田 純子

先生の扮するトナカイクリスマス
クリスマス市ドイツの星の逞しさ
原宿の街煌めきてクリスマス

大日向幸江
大日向幸江
田中 藤穂

《柚子湯》

デパートの巨大聖樹の虚飾かな
まなかに聖樹ゆつくりバスを待つ
歳末の煌めく聖樹人を待つ
聖樹の灯青と空色眩しめる

七郎衛門吉保
都築 繁子
都築 繁子
都築 繁子
都築 繁子

クリスマス合コン行かうよ女子寮湧く
躊躇に知らない小鳥クリスマス
信号待ちに抱き締めらるるクリスマス
クッキーのやうな古瓦クリスマス
クリスマス猫に叱られてゐる夢
クリスマス大衆酒場結露せり
チップスのしんしん冷えてクリスマス
クリスマスコロナ終息ひた祈る
夫と妻カレンダーのみクリスマス
クリスマス終つて残るマジパン菓

篠田 純子
田中 藤穂
篠田 純子
森 なほ子
秋川 泉
篠田 大佳
篠田 大佳
田中 藤穂
七郎衛門吉保
七郎衛門吉保
七郎衛門吉保

《聖樹》

病廊の聖樹にふれて月を見る
十一月ホテル早くも聖樹立つ
駅前パン屋聖樹を煌めかす

渡邊 友七
田中 藤穂
田中 藤穂

柚子湯して一人の暮し明日もある
柚子湯して何いそぐことなきひとり
柚子湯にはばさりと入りすると出づ
浮き沈む柚子湯に遊び長引きて
柚子湯して帯状疱疹癒えにけり
柚子風呂に思考全く消果てる
柚子風呂に溜息二つ沈めけり
冬至湯にあぎと尾鰭を庇ふなり
極楽が祖母の口癖冬至風呂
冬至風呂小さき柚子の自在なる
寄道は楽し無駄また冬至風呂
心中のかたはれのごと冬至風呂

鎌倉喜久恵
鎌倉喜久恵
佐藤 恭子
長崎 桂子
須賀 敏子
長崎 桂子
須賀 敏子
堀内 一郎
木村茂登子
赤座 典子
東 亜未
佐藤 竹僊

(佐藤喜孝記)

あとがき

今月の表紙

東京・千代田区の麹町四丁目交差点にある裸の少年像「夏の思い出」です。季節によって装いが変わっていますが、一月はサンタクロースの装いをしています。写真は二〇二四年の一月に撮ったものです。（撮影…墨沓）

毎日が日曜

月末そして年末に忙しくあとがきを書いてゐる。わたしも毎日が日曜組だが、それでも一週間のリズムはある。ごみを出す日。リハビリの日。生協の荷を受け取る日とつづく。一週間を広げて一年間でみるとまさに毎日が日曜である。言換へれば毎日がお正月、そして毎日が大晦日でもある。篠田大佳さんに『あを』の『俳句年鑑』原稿をお願いして二年目になる。『俳句年鑑』を求めると全頁に目を通すことにしてゐる。数年かかるので数年お

きに買ふことになる。二〇二六年版で井の中の蛙状態を脱することが出来るか不安だが読み始めた。

俳諧の歴史と共に去年今年 星野 椿

初日浴び戦後八十年思ふ 大串 章

うににして遍き光大旦 照井 緑

開巻冒頭の三句。井の中の蛙が肩すかしを喰はされてゐる。大佳さんの選ばれた『あを』の会員句は地に足の着いた作品であつた。（喜孝）

二〇二五年十二月号

発行日 十二月二十四日

発行所 〒177-0042

東京都練馬区下石神井一丁目六の三

電話 090 9828 4244 サンハイツ石神井2 一階

印刷・製本・レイアウト 竹僊房

カット／福井美佐子・ティリ エイマ

会費 一五〇〇〇円（送料共）／一年

ゆうちよ銀行（普）（店番018）4586402

佐藤 喜孝（サトウ ヨシタカ）